



ノリタケの森を訪ねて —ノリタケの歴史・技術に触れたひととき—

野田 俊成・谷 孝夫・尾畑 成造

2011年10月にノリタケの森を訪れました。ここは(株)ノリタケカンパニーリミテド創立100周年の記念事業として、2001年10月に設立された陶磁器に関する複合施設です。「文化と出会う」、「暮らしを楽しむ」、「歴史を感じる」をコンセプトに構成されており、ミュージアム、アウトレットショップの他、作陶やチャイナペインティングも体験できます。名古屋市中心部のノリタケ本社敷地内にあり、豊かな緑、歴史的な外観を維持しながらも、太陽光発電システム、LED街灯が完備され、環境貢献も考慮された施設です。地域の指定避難施設として地域社会貢献も行っているそうです。

ノリタケの森は今年10月に10周年を迎え、さまざまな記念行事が開催されるとともに、ミュージアムも一部リニューアルされました。そこで今回、美術品ともいえるノリタケ製品（主にオールドノリタケ）を中心に研究しておられる東京藝術大学講師 井谷善恵先生にもご同行いただき、ノリタケ製品の歴史やノリタケの陶磁器へのこだわりなどを解説いただきつつ、見学させていただくことにしました。本稿では、2011年10月13日に帝国ホテルにて発表されましたマスターピースコレクションとノリタケ製品の歴史に関する展示などを紹介したいと思います。

まずは、ノリタケの品質を追求する製品が並べられているプレステージショップへ。ここには、ノリタケの技術の粋を集めて作製されたマスターピースコレクションの展示があります。2種類のコレクションからなり（図1）、その一つ目が金銀彩鳳凰文のセットです。こちらは素地から新たに開発し、白さ、透光性を追求したものです。伝統的なデザインである鳳凰をモチーフに、四季折々の季節感が感じられる製品でした。もう一つはQueen's Garden。こちらは鮮やかな花が印象的です。高い技術レベルが求められるため、一人の絵付け技師がすべて加飾しているとのことでした。これに部分的にラスター彩や彫りによる飾りが取り入れられており、見



図1 マスターピースコレクション（左 Queen's Garden, 右 金銀彩鳳凰文）

る人を圧倒する気品を備えた製品でした。これらの製品製造技術は、空調や炉など設備が充実していない時代から脈々と受け継がれる技術であると聞き、改めてノリタケの技術力に圧倒されました。

次に、陶磁器に関する技術を見学できるクラフトセンターに向かいました。ここでは陶磁器の製造工程に従って、技術的な内容を解説いただきました。陶器、磁器については多少知識があったものの、フランスのリモージュでは磁器原料が当時、洗濯用石鹸に用いられていたことなどは意外な話でした。また、鑄込み成形に用いられる石膏はウィーン万博で紹介されて世界に広まったこと、用いる石膏の型の割り方、原型からの反転などに多くのノウハウがあることなども初めて聞く話でした。複雑形状の製品は複数のパーツを半乾きのうちに組み立てるのですが、このパーツの設計についても熟練者でなければ困難とのことでした。高級品となるボンチャイナでは、製品の精度品質を維持すべく本焼成の後、スプレーによる施釉をしていました。また、焼成時の歪みを抑制するために同じ素地で支柱を作り、製品が原型と同様の形状となるよう工夫されているところなどには、品質へのこだわりを感じました。このクラフトセンターの解説は、ビデオモニターにて実施されていますが、職人が直接質問に答えることもあるそうです。絵付け工程では、マスターピースコレクションで描かれているバラの加飾の職人技術を見ることができました。加飾は「バラに始まり、バラに終わる」といわれるほど技術を要するそうです（図2）。ノリタケ製品のバラの描き方の特徴のひとつとして、光のあたる先端部分を表現するのに、一度バラの花びらを描いた後に筆を用いて花びら先端部の色を抜くとのことでした。実際、驚くべき速度でバラの絵を完成させる絵付師の高い技術を目の当たりにし、深く感銘を受けました。今は、このような手描き製品は少なく10%ほどとのこと、転写技術や吹きつけ技術による加飾、サンドブラストによる凹凸加工なども多いそうです。転写の原理はプラモデルのデカールと同じです。この技術はドイツから伝わったのですが、当時転写紙は輸入に頼るしかなく、日本の職人が手で描くより高価な技法であったことなどは思いもよらぬところでした。

続いてノリタケ製品の展示と歴史を紹介するノリタケミュージアムを見学しました。ノリタケの創業者：森村市左衛門は大名屋敷に商売で出入りしており、1860年咸臨丸が渡米したときの路銀の調達も依頼されました。その際、メキ



図2 絵付師が加飾するバラの花柄

シコ銀との両替レートで日本が不利益だったことを痛感し、福沢諭吉に相談した結果、海外貿易を薦められました。それから10年以上経った1876年、貿易商社「森村組」を創業。異母弟の森村 豊を米国に送り輸入雑貨店モリムラブラザーズを開店、日本の骨董品を販売しました。また、輸出したものを販売する中で、お神酒徳利が花瓶としてよく売れたのを契機に、磁器の製造も手がけるようになりました。河原徳立、石田佐太郎など実力を持つ絵付師の親方との専属契約のもと絵付けが行われており、「ジャポニスム」の流行に乗った製品作りがなされていきました。その後、絵柄を和風デザインから西洋デザインに変化させ、ノリタケ製品の特徴の一つである絵具の厚盛り技法が取り入れられてきました。海外には「moriage」として伝わり、「モリアージュ」と呼ばれているそうです。これらはファンシーウェアとよばれ、主に壺や皿といった部屋を飾るインテリアアイテムが中心でした。しかし当時の日本の磁器は少しくすんだ色をしており、米国で求められる真っ白な素地色とは異なっていました。そのため、白い素地を作るための研究を10年にわたって行ったそうです。白い生地ができるようになって1904年、愛知県愛知郡鷹場村大字則武に工場を設立しました。この工場が現在の(株)ノリタケカンパニーリミテドです。しかし、日本初のディナー皿の販売にはさらに10年の歳月が必要でした。当時のディナー皿は1ダースセットでなければならず、厳しい寸法精度が要求されたことやそのための開発が困難を極めたことなど、その背景を伺い、技術の蓄積と伝承の重要性を改めて実感しました。

最後に、「ディナー皿で辿るノリタケデザインの変遷」と、現在行われている企画展示「碗皿物語」を見学しました。「碗皿物語」では、ノリタケが製造してきたカップ、ソーサの歴史が実物展示されていました。中でも大量受注のきっかけになったアザレアという花柄を加飾したカップ&ソーサについては、1920年当時の製品を見ることができました。この当時、アメリカで爆発的に販売された背景には、第一次世界大戦でドイツからの輸入が滞ったということがあるようですが、大陸横断鉄道の開通によって東西の物流が発達し、食文化が豊かになって食器のニーズが高まる、という社会変化があったのではないかと推測します。一方、コーヒーカップの重さは、一般的に日本では軽いものが好まれ、西洋では重いものが好まれたそうです。これは、日本はお茶碗の文化であり、直前で注ぎ、手で持つ習慣であるのに対して、西洋では召し使いが運んでくるため、保熱性が高く、耐久性も高いものが望まれたことによるそうです。

「ディナー皿で辿るノリタケデザインの変遷」では、1914年に初めて製造販売したディナー皿から現在販売しているディナー皿(26-27cm)のうち200枚を選定し、古い順に壁に並べてありました(図3)。歴史背景とともに紹介されており、時代の変化に伴い、好まれる素地の白さやデザインが変化する様子がよくわかりました。1970年までは中心にワ

ンポイントの絵柄でしたが、それ以後縁のデザインが変換し、そしてカジュアルなデザインへと変化していったように窺えます。生活様式の変化にも対応し、耐熱、強化、食洗機対応にも取り組んでいたことが紹介されました。

このように多くの解説を伺っているうちに閉館の時間となりました。まだまだお伺いしたい内容も多くありましたが、最後にクラフトセンター前で集合写真を撮影して終了しました。次回は井谷先生のインタビューで再現できたらと思います。

このほかにも10周年記念行事として絵画や彫刻の展示などを行い、10周年イベントは大変盛況であったとのことでした。これから新たな10年としてさまざまな内容の企画や展示が行われるとのことで、再度訪問したいとの思いを胸に秘め、ノリタケの森を後にしました。

末筆となりますが、今回、ノリタケの森 運営・企画グループ グループリーダー鈴木喜久夫様、安藤忠治様、中井宏美様に多大なるご配慮と親切な解説をいただきましたこと心より御礼申し上げます。また時代背景やノリタケ製品の変遷などなかなか知ることができない内容についてご教授いただきました井谷先生に感謝の意を表します。



図3 これまでに製造されたディナー皿200選

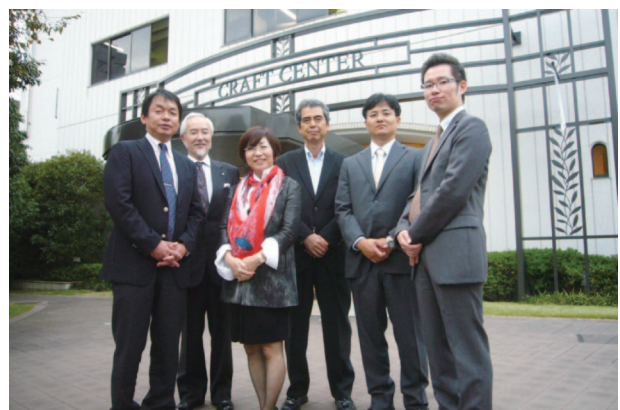


図4 クラフトセンター前にて

■筆者紹介 野田 俊成・谷 孝夫・尾畑 成造

[連絡先] ノリタケの森 〒451-8501 愛知県名古屋市区則武新町3-1-36 URL <http://www.noritake.co.jp/mori/>

[投稿歓迎-編集委員会では「ほっと」spring欄への会員からの投稿を歓迎します。編集事務局までご一報ください。]